

お墓について考える

民俗学者の柳田国男に『先祖の話』という小品があります。

そのなかに「自分はそのうちご先祖様になるんだ」と言って、そのことだけを頼りに生きている老人の話が出てきます。柳田は不思議なことに、その老人を感動して見ているのです。

『先祖の話』が書かれたのが昭和20年の4月から5月にかけてなので、東京大空襲の時期に重なります。ちょうど上野の森の桜が満開の時期でした。満開の桜の下で、累々と続く死者の列に、柳田は「ご先祖様」のリアルな姿を見ていたのでしょうか。

この作品を読んでから、桜の時期が近づくと、ご先祖様や死者のことについて考えるようになりました。

■ 先祖累代の墓

死者を弔うという、先祖累代のお墓を守るというイメージが浮かびます。

相続の仕事をしていると、先祖累代の墓を誰が守るかとか、墓守りをするのだからそれだけの見返りが欲しいとか、あるいは嫁ぎ先の墓には入りたくないとか、思いもよらぬ本音を聞くことがあります。こういう話がでてくるのは、ほかに話し合うべきことのない穏やかな相続か、些細なことでも争いの種になる「争族」のケースか、いずれか両極端の場合のように感じます。いずれにせよ人の気持ちの機微に触れる問題です。

しかし、先祖累代の墓に遺骨を安置するというお墓のシステムは、「火葬」が一般的になったごく最近に確立したものだそうです。国民生活センターの「近年の墓事情とその背景」という記事で知りました。

厚労省の統計によると、今でこそ100%近くの人が火葬に付されますが、1970年代には火葬率は8割弱に過ぎませんでした。つまり、ほんの半世紀前までは、5人に1人は土葬されていて、累代のお墓に入る余地すらなかったのです。

さらにお墓をめぐる環境も、近年大きく変化しています。1980年には65歳以上の高齢者のいる世帯のうち、三世代同居の割合がほぼ5割を占めていました。つまり高齢者がつねに身近にいて、その身近な親族が亡くなるたびに「同じ墓に入る」ということが、実感として感じられたのです。ところが近年では、三世代同居率は5%ほどまで下落し、各世代がバラバラに生活するのが当たり前になると、同じ墓に入る理由さえも希薄になっていきます。

今のように「お墓を守る」という考え方を「家」単位で考えるならば、人口が減少する

につれ、その担い手が少なくなってゆくのは、社会保障制度と同じなりゆきです。

かといって、経済原理にまかせて「弔うこと」そのものが手薄になっていくのは、人間の精神性を衰退させることにほかなりません。

■ 無縁遺骨のこと

人口の減少によって遺族のいない死者も増えています。この20年間で引き取り手のいない遺骨が急増しているのだそうです。

親族が判明しているにもかかわらず、誰も引き取ろうとしないために、火葬したり納骨したりといったことを、自治体が遺族に代わって行うのです。経済的に余裕があっても、既婚者であっても、親族との関係が疎遠だったために、死後に無縁遺骨になるケースも珍しくはないということです。

それでも、生前に疎遠だったからといって、無縁遺骨として自治体に預けることに抵抗を感じる人もいて、親族からの希望で3万円の納骨代を払えば、「ゆうパック」でお骨を送ることを引き受けるお寺が全国で増えているのだそうです。

この無縁遺骨の話を知ると、墓の継承者がいない高齢者たちが、累代の墓を合葬墓に改葬し、永代供養をするという、最近耳にする話題も、寂しいだけの話ではないと私は思います。血縁を越えた人たちと一緒にいる共同墓や合葬墓を志向する人は多く、こうした共同墓を公営墓地に新設する自治体も増えているそうです。

共同墓を管理する市民団体のなかには、生前に契約者どうしで定期的に親睦会を催したり、共同墓参をするところもあるそうで、これならば、ろくに顧みられることのない先祖累代の墓よりも、よほど居心地が良さそうに思えます。

■ 死者を弔う

能には「跡弔いて賜（た）び給え」というセリフがよく出てくるのだそうです。

自分の死後の供養をお願いしますという懇願です。死後を弔ってくれるという約束を得ることで、はじめて人が成仏できるということです。

死んだ後も死者が生者と関わり続け、そうすることで生者は自分のけし粒ほどの一生というものを、捉え直すことができる。そういう使者と生者の共通理解が、人間の霊性を支えているのではないのでしょうか。

柳田国男の『先祖の話』のなかで、「そのうちご先祖様になる」と言っていた老人は、死者とともに生きる人だったのでしょう。自分の一生が「けし粒」の様なものであることを老人は知っていたからこそ、柳田国男はその老人に感動したのだと思います。そして人間の霊性とは、そうした慎ましい態度にこそ宿るのだと思うのです。

(所長 瀬戸 英晴)